

## 2008年度 研究室便り

卒業生・修了生の皆さまにおかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。本年度も研究室の近況をご報告させていただきます。

教員スタッフは、神寶秀夫教授（ドイツ中・近世史）、山内昭人教授（インタナショナル史）、岡崎敦准教授（フランス中世史）の三名の専任教員に加えて、2007年度は、非常勤講師として、福岡大学より星乃治彦先生（ドイツ現代史）、九州国際大学より高田実先生（イギリス近代史）にご出講をお願いしております。五月には、富山大学の徳橋曜先生（イタリア中世史）による集中講義が行われました。

学生は、学部・大学院をあわせて22名が、日夜勉学に励んでおります。8月には、4年生の杉崎愛さんと入れ替わりに、岡本愛さんが、同じく交換留学生として、ストラスブール第二大学へと旅立ちました。このところ毎年のように留学する学生さんが続きますが、このような外部へと開かれた姿勢を、研究室としても支援していきたいと考えております。

修士課程では、向原宜臣君と大浜聖香子さんが、修士論文の作成に向けてがんばっています。12初旬には、お二人とも史料論研究会において、その一部を発表しました。博士後期課程については、森崇浩君（スイス中・近世史）が10月の広島史学会で、法花津晃君（フランス中世史）が12月の九州史学会で、それぞれ研究報告を行いました。同じく岡部直樹君は、ロータリー奨学金によるブルガリア留学が決定し、現在出発に向けて準備中です。

研究室では、年度初めの「進学（専門分野決定）式」、数次にわたる「卒論構想発表会」、夏休みの「オープン・キャンパス」、9月末の「進学ガイダンス」、年度末の「追い出しコンパ」等が年中行事ですが、数年前に復活した夏の合宿は、今年度はハウステンボスという豪華版でした。

本研究室主体の学会・研究会関係では、10月と2008年3月に九州西洋史学会、12月に九州史学会（西洋史部会）が例年通り開催されました。九州西洋史学会秋季大会では、元助手の小山啓子さんの近著（『フランス・ルネサンス王政と都市社会』九大出版会）をめぐってのシンポジウムが行われ、全国からパネラーが集っての活発な議論の場となりました。5月の徳橋先生の集中講義に際しては、「近代国家研究会」が開催され、「14-15世紀のフィレンツェ領域支配の多元性と一元性」と題する徳橋先生の報告を軸に、活発な議論が交わされました。科学研究費の助成を受けている「西欧中世史料論研究会」では、9月と12月に研究会を開催しました。その他、ラテン語読書会「タキトゥスの会」や「クリス・ウィッカム読書会」を始めとして、多様な催しに会場と人材を提供しております。このように本研究室は、九州における西洋史学研究ならびに国際的学術交流の拠点として、周辺の大学や研究教育機関と連携しつつ、研究教育・社会活動を変わず推進しています。

最後に、研究室にてかつて助手をお務めになられたお二人が、常勤のポストを得られた

ことをご報告いたします。宮寄麻子さん（古代ローマ史）は、淑徳大学国際コミュニケーション学部、中堀博司さん（フランス中世史）は、宮崎大学教育学部に、それぞれ2007年4月よりご奉職になりました。それぞれ、本学にて博士号を取得なさって後、間もなくの朗報でしたが、後に続く者たちにとってもなによりの励みとなることでしょう。お二人のますますのご活躍をお祈りいたします。

末筆ながら、皆様のご健勝、ならびにより一層のご発展を心よりお祈り申し上げます。

（文責 岡崎敦）

#### 会員近著紹介

星乃治彦『ナチス前夜における「抵抗」の歴史』ミネルヴァ書房、2007年。

星乃治彦（共編）『ヴァイマル共和国の光芒ーナチズムと近代の相克』昭和堂、2007年。